
いざ往かん、第二生徒会 4

羽賀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いざ往かん、第二生徒会4

【Nコード】

N8551G

【作者名】

羽賀

【あらすじ】

主人公御堂たち、第二生徒会に届いた投書。『悩みを聞いてください』と書かれたそれは、御堂の忌み嫌う、東成高校のハーレム野郎こと霧島からのものだった。話を聞けば、彼は好きな人がいるが、思いが伝えられないのだという。さて、第二生徒会の面々はどうするのか！第二生徒会シリーズ第四弾です。

「あら、御堂先輩」

「よう、美水」

昼休み。人のごった返す学食に向かい、財布の都合上仕方なく味噌汁だけを購入し、もう既に俺の定位置と化しつつある学食端この席に向かうと、何故か後輩かつ第二生徒会の相棒でもある美水よしみずがいた。ていうか目の前に広げられてるのは誰がどう見ても重箱だよな？ しかも手作りの。学食は弁当持つてきてる奴が食事するところじゃねーんだよ！

「いいじゃないですか、細かいことは気にしないのが一番です」
「だからお前は何で俺の心を読めるんだよ！」

この美水、趣味は俺の心を読むこと。何でかしらないが、俺は美水の前ではプライバシーも何も無いに等しい。勘弁してくれ。

「先輩、座ったらどうですか？」

「随分と偉そうだなお前。別にいいけど」

真面目な顔で言われ、俺は美水の正面の席に座る。おお、座ったら座ったでこの重箱威圧感がすごいぜ。うらやましくなんかないもん！ 俺は味噌汁を啜った。

「ふ……この大豆を発酵させた味がたまらないぜ」

「わかって言ってます？」

「いや、正直な話分からん。つつか熱くて困る」

俺は猫舌なんだけどな。

「じゃあ何で味噌汁なんて……」

「これしか、これしか買えないんだよおおお！」

俺の財布に入っていた金額は百円。味噌汁は六十円なので、もう残り四十円しかない。なんてこった、パナコッタ。

「何が言いたいんですか？」

「いや、俺にもよくわからん。……美水」

「なんですか？」

俺の言葉に応答しながら、美水は優雅に昼飯を食べる。

前から思っていたんだが、多分こいつは良家の生まれだ。普段は見る影もないが、時たま見せるその立ち振る舞いは、気品に溢れていると思う。

「別に、良家というわけではないですよ」

「だから人の心を読むな。っていうかそうじゃなくて、それは手作りなのか？」

俺は重箱を指差し、問うた。色とりどり、様々な料理。きっと栄養のバランスも考えて作られているのだろう。思わずだれが止まらない。

「私の手作りです。が、汚いですよ先輩」

「うるさい。仕方ないだろ味噌汁だけなんだから！」

「はぁ……。それでは、お昼に食べるものもなくてひもじい思いをしているかわいそうな先輩に、少し分けてあげましょう」

「マジで！？ 持つべきものは可愛い後輩だな！」

「おだてても何も出ませんよ」

と、言いつつも、美水の顔はどこか嬉しそうだ。こういう所があるから、こいつは可愛いんだよな。

「なっ——！」

「いやなんでそこで顔を赤くする？」

「べ、別に……。なんでもないですっ！」

変な美水だな。そう思ったら、脛に蹴りが入った。

「……それでは先輩。あ、あゝん……」

「えー？ ちょ、ちょっといくらなんでも展開がおかしくないか！？ 何か色々重要な課程をすっ飛ばしているような気がしないでもないっていかやはり男としてそういう事をしてもらえるのは嬉しいことではありますけれど、ですがやはりそこに至るまでにはもう少し段階を踏まねばいけないと思うのですよよよよ！」

「私もそう思うな……美水さん」

「うお、羽佐間^{はさま}っ!？」

「羽佐間会長……」

差し出された美水お手製の玉子焼きを前に悩んでいた俺の前に現れたのは、東成高校生徒会長、羽佐間杏子^{きょうこ}であった。髪型をポニールにしているため活発そうな印象を与える美少女で、実際かなり快活で人当たりのよい、俺の憧れでもある人物だ。おい、美水足を踏むな! 説明が遅れたが、俺は御堂と言って、東成高校第二生徒会長だ。第二生徒会と言うのは、東成高校生都会を追い出されてしまった薄幸の美男子こと俺が、俺を生徒会から追い出した中心人物である、副会長の竹元^{たけもと}と書記の沼口^{ぬまぐち}の精神に少しでもいいからダメージを与えるため、悪口投書を生徒会に送りつけることを目的にして設立した特別機関だ。構成人員は現在三名。俺と、美水と、もう一人、演劇部期待の新星だった天宮^{あまみや}はるかである。

「美水さん……抜け駆けはいけないよね？」

「別に……そういう意味での行動ではありませんよ? 単に、お昼に食べるものが味噌汁だけという先輩を憐れんであげただけですから」

「そのわりに、その重箱には美水さんだけでは食べられないくらい入ってるみたいだよ?」

「そつえばそうだな……。作りすぎたのか?」

「ええ、まあ……」

煮え切らない態度だ。別にいいけど。

「ていうか、玉子焼きくれるんじゃないのか?」

「あ、はい。それじゃあ……あゝん……」

「それなのかよ! 普通に割り箸あるからそれで……」

「ダメです! これでなければあげません」

「ちょ、ちよつと美水さん! 御堂君、私のうどん半分あげる!

だから、一緒に食べよ!」

「え……」

なんだ、何が起こつているというんだこの俺に! これじゃあま

るで、ギャルゲの主人公じゃないか！

複数の女の子に言い寄られるシチュエーション……夢にまで見たこのシチュエーション……俺はついに手にしたと言うのか……ハーレムルートへの片道切符を！

「そ、それでは二人ともいただきます！」

二人から顔面にパンチを食らいました。

「先輩がいけないんですよ。馬鹿なこと言うから」

「そうだよ、御堂君の馬鹿」

「……俺が悪いのはわかりました。が、どうして美水さんは俺を踏みつけ、羽佐間さんは俺の上に座っていらつしやるのでしょうか」「罰です」「罰だよ」と、二人は息のあった回答をくれた。

現在俺は、沢山の生徒でこった返す学食の中四つんばいにさせられ、美水に踏まれつつ、羽佐間に背中の上に座られている。くっ、みんなの視線が痛いぜ！ いや本気で視線が痛いんですけど！

「降りてくれ羽佐間！ 視線が痛い！」

「なに？ それは私が重いつて言いたいのか？」

「誰がそんなこと言った！ みんなの好奇と侮蔑の視線が痛いんだよ！」

「あら、先輩はそんなこと気にするような人じゃなかったはずですけど」

「ていうか一番気にすべきはあんただよ！ 衆人の眼前で、人のこゝと足蹴にしてくるんだから！」

美水よ……上品なイメージとか、今のお前を見たら一瞬で崩れ去るぞ。

「別にいいですよ、誰になんと思われようが」

「タフですね、すごく」

「ええ……。先輩が見ていくだされば、それで」

「はいストップ私がいる前で惚気ない」

「会長、邪魔ですね」

「その台詞、そっくりそのまま返すよ」

この人たちは何でこんなに険悪なムードになっているのでしょうか。首を捻った俺は、現実逃避するために視線を学食内にやった。目が合う度に「ひっ」とか、「うおっ」とか声に出して引くのは勘弁していただきたい。俺だって好きで踏まれてるわけじゃない。嬉しいけど。

ゆっくりと学食内を見回していると、なんだか、女の子が一杯集まっている一角を発見した。しかもみんな上玉だ。うへへ。

「その言い様だと、先輩は悪の親玉ですね」

「黙れ」

人の心を読むなどと言っているのがわからないのかこの小娘は。

俺は美水に心を読まれたときのために編み出した最強の攻略方法、『放課後の教室で美水を抱きしめてそのまま行為に至るまでを事細かに妄想する』を発動した。ふふふ、案の定顔を真っ赤に染めてつてちよつと待て何だその手に握る凶器は。ちょ、冗談ですからやめてくださいお願いします！

「……もう、変なことは想像しないと誓いますか？」

「誓います。誓いますからその小太刀をしまってくださいいいいい！ いやあ、切っ先が首筋に触れてるってあ、あ、ちよつと切れたよ、おい！」

「ぎゃあぎゃあ喚かないでください」

「喚くわ！」

「そんなことより先輩。何か気になったものがあつたんじゃないんですか？」

「ああ。ちよつとな……ってお前は俺の命よりも大事なものがあると思ってるのかい！」

「先輩の値段は……大体五百円くらいでしょうか……？」

低っ！ ていうか勝手に決められたくないわ！

「で、何があつたんです？」

「あれだよあれ。何か女の子が一杯いて……中心には男……ああ、

「アイツ死なねえかな」

「あ、なんだか久しぶりに人間の小さい先輩を見た気がします」
「何でこいつこんなに嬉しそうなんだ。」

「あれは確か……御堂君のクラスきりしまの霧島君じゃない？」

「……あー、そういえばそうだな」

「羽佐間の言葉に、俺は頷く。」

「霧島と言えば……東成高校が誇るハーレム野郎と聞く。つまり男の敵だ」

「先輩は女の敵ですけどね」

「黙っていなさい。……毎日違う娘に告白されることなど当たり前。周りにはいつも数人の女子を待らせているらしい。マジ死ねばいいのに」

「人間小さいね」

「くそつ、奴はわかってないんだ……。あいつが女の子を待らせてる」俺たちに女の子が寄ってこない。つまり、現在わが国を騒がせている少子化は奴が引き起こしていると言っても過言じゃないんだわかるか!？」

「霧島、霧島さえいなければ……俺だって彼女が出来ていたのかもしれないのに！」

「霧島先輩がいなくても、出来てたかどうか微妙ですけどね」

「うるさい」

「あ、こつち見たよ」

「彼奴め……俺の視線で呪い殺してやるわ」

俺は目に力を込め、霧島を力いっぱい睨み付けた。ははは、もてない男の苦しみと恨みに打ち震えるがよいわ！

「あ、爽やかな笑顔を見せてますよ」

「くそつ、奴には俺の怨嗟ビームが効かないのか!？」

「さあ？ 笑顔で手を振ってますよ？」

「くつ、羽佐間すらその手中に収めようと言う魂胆か!」

「だ、大丈夫だからね。心配しなくても、大丈夫」

なんのこつちゃ。

「しかし俺の怨嗟ビームが無視されるとは……。所詮俺はこの程度
つてことかよ……」

「もう少し気づくのが早ければよかったんですけどね」

「もうあなたは黙っててください」

美水の毒舌は、止まるところを知らないらしい。

結局美水とあーだこーだ言い合っているうちに、我が仇敵霧島は
姿を消してしまっていた。

こんちくしうめ。

「うーっす」

「……」

放課後。第二生徒会室という名の社会準備室にやってきた俺は、
ぼんやりと本のページをめくる天宮を見た。俺が部屋に入ってきた
ことにどうやら気づいていないようで、その瞳は熱心に本のページ
へと向けられている。彼女が何の本を読んでいるのか少し気になっ
た俺は、そろりそろりと近づいて、天宮の後ろから本の内容を覗き
見た。

「……」

思わず言葉を失う。

開かれたページの中央、大きく躍る見出しは『彼女たちが、本当
の女になる瞬間！』だ。そしてその下にはカラーで、俺と同年代か
それより上か位の女の子の写真が載っている。言わずもがな、一系
纏わぬ姿で。つまり天宮が読んでいるのはエロ本ということだ。

「……あの一、天宮さん……？」

「ひっ！？ あ、あのあのあのですね、これは、演劇の資料として
活用しているわけでありますよよよっ！」

俺の存在に気がついた天宮はエロ本片手に飛びずさり、それを後

る手に隠した。

「というかこの世の中のどこに、舞台上で性交渉を行う演劇があると言っのか。」

「あ、うんまあ人の趣味をとにかく言うつもりはないから……」

「うう……先輩誤解してますよねえ……」

「そいつの趣味以外だとして、女子が何でエロ本を読むのか俺は聞きたい。誤解も何もあるまいな。」

「じゃあ理由があるのか？」

「もちろん！ 演技の幅を広げるためです」

「何の演技だ、何の」

「これを読破したとき私は、『淫乱女子。校生』の演技が可能になるのです！」

「せんでええわ」

この天宮はるか、元は演劇部所属の少女であつたのだ。それも、完璧にその役になりきれる特殊な才能を持った、演劇部期待の新星だが、俺たち第二生徒会と少し付き合っただけで、すぐに鞍替えをしてしまった。曰く、『演劇部よりこっちのほうが面白いんですよ』。

その言葉は嬉しいが、そのおかげで俺は日々演劇部から命を狙われる毎日だということにこの少女は気づいているのだろうか。

「うう……。でも、レパトリーは増えました！ 試みましょうか？」

「いや別に……」

と、そこで俺は思いつく。天宮は、いい意味で純粹だ。俺の望んだ役を、完全に作ることが出来る。例えば、先輩に恋する後輩を演じてくれと頼めば、実際彼女は俺に恋しているがごとく、その役を演じる。

ならば、『露出癖のある少女』とか、そういう類のものを頼めば、俺は合法的に彼女の裸体を拝めることが出来るのではなからうか。そしてあわよくば……ぐへへへへ。

「先輩、どうしたんですか？ 顔がすごい事になってますよ？」

「天宮……『淫乱少女』を演じてくれ！」

「はい、いいですよ。五万円です」

「金取るのかよ！」

「はい。慈善事業じゃありませんから。あ、でも、先輩は特別ですから、五万円の手のご奉仕まではしてあげますよ？ 普通だったら脱衣だけですから、お得だと思いませんか？」

「お、お前……まさかいつもこんな商売を……」

「そんなわけないじゃないですか。冗談ですよ、冗談」

ふう……なんかやけに真剣だったから、思わず真実かと……って、これも演技か！？

「はい、正解です。演技の幅を広げるためです、欺くにはまず味方からって言いますもんね」

「お前の場合、結構ひやひやするぜ……。嘘なのか本当のことなのか、区別がつかねえ」

「最高の褒め言葉です、それ。あ、でも、安心してください。私はもう、心に決めた人がいますから。……まあ、ライバルは一杯ですけどね」

えへへ、と可愛く笑って、天宮は俺に抱きついた。……え？

「えへへ」

「天宮？」

「二人きりですから、誰にも見られませんし……」

「はあ……。あ、そうか。演技の練習か……いやむしろ、心に決めた人に対する対応の練習？ それなら俺に抱きつくのはやめとけ」

「え、なんでですか？」

「俺なんかじゃなくて、ちゃんと好きな人に、真摯な態度で抱きついてやれ。誰かで抱きつく練習してきましたってより、全力で、不器用ながらも抱きつかれるほうが俺は嬉しい」

「……やっぱり、先輩は先輩ですね」

何が言いたいのか全くわからない。が、天宮はゆっくりと俺から

離れた。

む、ちよつと残念……もう少し抱きついてもらうべきだったか。何で俺は綺麗事ばかり言いやがるんだ。

「遅くなりました……って、先輩、何してるんです？」

天宮に対する自分の対応を後悔した俺が机の角に頭を打ち付けていると、美水がやってきた。

もう慣れたのか、割と呆れたような瞳で俺を見ている美水に、親指を立てて言ってる。

「ちよつと、この口が綺麗事ばかり言いやがるんでな」

「なにがなんだか……。あ、そうだ先輩……、これを」

「ん？ 投書？ 俺たちにか」

美水が差し出してきたのは、第二生徒会室前に設置されている投書箱に入れられた、生徒からの投書だった。珍しい。今までの投書は、現生徒会を倒せという激励文か、御堂死ねという演劇部からのカミソリレターだけだったのだ。

「どれどれ、読むぞ。……拝啓、第二生徒会様。いきなりすみません。ですが、生徒たちのために立ち上がった素晴らしい思想の持ち主であるあなた方を見込んでお願いがあるのです。私にはとある悩みがあります。どうかその悩みを聞いて、手助けをしていただけませんかでしょうか。放課後、図書室で待っています。二年C組、霧島冬哉……って、あのハーレム野郎霧島からの手紙か？」

「ええ、どうやらそうみたいです」

「あの野郎、俺たちをカウンセラーと勘違いしてないか？」

「先輩、いいじゃないですか。どうせここにいたところで、悪口投書しか書かないんですから、話を聞くだけ聞いてみましょうよ。それに私、霧島先輩を見て、演劇の幅が広がるかもしれせんし」

「はあ……。美水はどうだ？」

「完璧超人と噂の霧島先輩に悩みがあるとすると、少し気になります。すが……」

「やれやれしゃーない。多数決で俺の負けだ……。よし、行こうぜ」

こうして第二生徒会メンバーは、発足して始めて、生徒のお悩み相談を行うこととなった。

指定された図書室に向かうと、当然ではあるが霧島がいた。というか人を呼び出しておいでいなかったら怒るぞ。

俺たちがやってきたことに気づき、霧島はぱあっと顔を輝かせる。そして、悩殺スマイル。美水も天宮も、一瞬動きが止まった。

「おい、お前ら」

「あ、い、いけません……」

「これは……才能ですね……」

「わざわざ来てくれるなんて……ありがとう、第二生徒会の皆さん。御堂君も、本当に助かるよ」

「ああ気に知るこたあない。つつわけでとつと話したまえ、汝の悩みを」

その爽やかオーラがどうも気に食わない俺は、投げやりに言う。

霧島は少し傷ついた顔をした。はははざまあみそづけ。

「先輩失礼ですよ（バキッ）」

「ちゃんと応対してあげないと（ゲシッ）」

「お、お前ら……心に決めた人がいるとか、惑わされないとかいったのは誰だよ……」

笑顔で鉄拳が飛んでくる。

美水と天宮からの制裁を受け、所詮女は顔なのかと俺は心で涙した。

「だ、大丈夫かい、御堂君」

「ふ、そんな余裕綽々なオーラがすげえムカつく……ぐふっ」

本当に俺を心配しているような顔で、手を差し伸べてくる霧島。さすがイケメンはやることが違うぜ……。

「霧島先輩、この人はどうでもいいですから、本題にどうぞ」

「え、でも……」

「大丈夫ですよ、御堂先輩は無敵だから」

「て、テメエら……」

「じゃ、じゃあ……僕の悩みを語らせて貰おうかな……」

最後まで俺を気遣う視線を見せる霧島に、俺は親指を立てて大丈夫だということをアピールした。

そして反転させる。イケメンは死ね！

「御堂先輩、少し眠っていてください」

「ちょ、待って、冗談だから鉄拳はやめて」

「頸動脈を握るだけですよ、うふふふ」

「ちょ、ま、おま……」

「あのー、話してもいいかな？」

「あ、どうぞどうぞ。御堂先輩は私たちが押さえますから」

おいおい俺に対する態度と随分温度差があるじゃないかいそのこの後輩二人。

「霧島先輩はいい人そうですね」

「否定は出来ませんね」

「お前らなんか嫌いだった」

「あの、話しても、いいかな？」

「あ、すいません、どうぞ」

天宮の言葉に頷き、霧島はゆっくりと語り始めた。

長ったらしいので掻い摘んでみると……、

「つまり霧島、お前には好きな人がいるが、思いを伝えられないんだな？ けっ、ハーレム野郎の癖に」

「僕だって、好きで女の子に囲まれているわけじゃないよ」

「その態度がムカつくんだよおおおお！」

あれだけ多くの女の子に囲まれているくせに、このハーレム君は心に決めた人がいるそうだ。そして、その人に思いを伝えたいが、如何せん勇気が出ない。どうか解決策を授けてくれと……。

「……手紙とかは、どうですか？」

「手紙か、それはもう既に書いているんだ。原稿用紙三十枚分になつてしまつたよ」

限度を知れ限度を。それは既にラブレターではなく愛の短編小説と化している。

「それなら、もう告白準備はオツケーじゃないんですか？」

「違うんだ……勇気が、勇気が欲しいんだ！ 僕は昔から奥手でね……」

「くそつ、情けない言葉もイケメンだと百八十度違うのは何故だ！」

「御堂先輩も、何か考えたらどうなんですか？ 役に立ってませんよ」

美水さんひどいです。

「考えるつつつてもな……。俺はまだ誰かを心の底から好きになつたことかないし」

羽佐間はいくまで憧れの人。好きとか、そういうのとは違う。と思う。

「それでも、何かないかな、御堂君」

「そうだな……例えばだ、その好きな奴と、自分を同じ環境におけばどうだ？」

「というのは？」

「お前の好きな人が卓球部だったら、お前も卓球部に入つて一緒に汗を流して、同じ時間を過ごせてことだ。同じ時間を過ごせばその人のこともわかるし、手紙を渡すことくらいできるようになるだろ」

「そ、そうか……そんな手段もあるのか……」

ふ、この男、俺が適当に物を言ったことに気づいていないぜって美水さん足を踏むのやめてください！

「真面目に考えたらどうですか？」

「……いや、正直思いつかん。手紙も書いてるんだし、後は霧島の覚悟だけだろ？」

「まあそれはそうですが……」

美水と共に、霧島の顔を見やる。

凄く、真剣な眼差しだ。

「……はあ。霧島……、俺は告白とか、まだ体験したことがないけど、これだけは言える。全力で相手にぶつかって来い。そうすれば相手も答えてくれるはずだ。大体お前は顔もいいし、性格もいいし、同性から見たらム力つくだけの完璧超人だが、異性からの評価は高い。いやむしろ高いなんてレベルじゃない。……だから、相手が首を縦に振らないほうがおかしいと思うが、もし万が一告白に失敗したら……その時は悩みを聞いてやったよしみだ、慰めてやるよ。だから、安心して突っ込んで来い！」

「御堂君……」

「へ、俺らしくもないが……ま、せいぜい応援してるぜ、霧島。じやあな」

妙に自分の台詞が気恥ずかしくなった俺は、逃げるように図書室を後にした。無茶苦茶顔が赤い気がする。柄でもないこと言っただし、背中からかけられた「ありがとう、御堂君！」という声は、勇気に満ち溢れている気がした。

……ま、たまにはこんな感じの俺もいいか。

翌日。放課後、美水と下らない話をしていた俺は、予期せぬ来訪者に見開いた。

入り口に立ってたのは、昨日相談相手になってやったハーレム野郎、霧島である。

「……霧島？ まさか、失敗したのか……？」

「いや、違っただ、御堂君。僕も、第二生徒会に入りたいと思ってね」

「……？ いやまあいいけど、なんで？」

「君の言葉で、僕は勇気付けられた……。『好きな奴と、同じ環境

（後書き）

こんにちは、ついに第四弾目の第二生徒会シリーズです。

今回メインのはずの霧島君ですが、出番が極端に少ないですね……。自身の文章構成能力のなさが悲しくて仕方ありません。

ですが、彼が第二生徒会に加わった今、物語はさらに混迷を極めることとなります！

ドタバタ学園ギャクコメディを目標とする本シリーズ、彼のおかげでさらに物語が広がるような気がします。やった！

というわけで、次回もお楽しみに。

お読みくださった読者の皆様、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8551g/>

いざ往かん、第二生徒会 4

2010年10月8日15時57分発行